

シャドーイングからセルフトーク・ミラーリングへの 段階的指導方法の開発

鈴木 克彦

【抄録】 英語初・中級レベルの中高生の授業で、テキストreadingにoutput志向のshadowing&self-talk法を取り入れることで、英語理解力が高めることができる。この方法はコミュニケーション重視の時代の授業外での自立的な学習方法としても有効である。

【キーワード】 self-talk学習法 shadowing mirroring pacing

1. はじめに

英語で独り言を言うSelf talkという学習方法はTim Murphy (2003) がShadowingから発展させた学習形態として提唱した。これは音声重視の英語産出能力を高めることを目標とする学習方法であるが、大学生等の上級レベルの英語学習者を念頭においたものである。方法はいたって簡単で、自分で自分に英語で語りかけるものだ。英語で独り言を言うことである。これだけならかつて松本亨が「英語で考える本」(1968) で提唱したThink in Englishと大きく差はない。この本は古いながらも再版されて今なお現在の英語学習者の読者に絶賛されているのだが、Tim MurphyはShadowingと結びつけたところが、新しい部分である。Shadowingはもともと通訳養成の初歩的な訓練手段であるが、玉井健が大学英語教育に応用し、「決定版英語シャドーイング」(2004) で世に知らしめた。

Tim Murphy はShadowing→Self talkという段階を踏むことで、無理なく英語を上達させることができるとした。

Shadowingや、Self talkは、どのレベルの英語学習者でも十分使える学習方法と言える。私はこれを高校1年生を対象とし、授業での応用的な実践方法の開発を行い、中高生にも学習効果があることを実証したいと考えた。

Self talkは個人学習の方法であるが、私はこれを協同学習で言うpacingというスキルと組み合わせ、双方向的なコミュニケーション場面を作ることでSelf talkを参加する学習者間で互いの英語力を高めあうという学習効果の互恵性の有無も合わせて検証したい。

2. 背景理論および概念規定

shadowing、self-talk、pacingという訓練スキルはそれぞれ通訳、自己啓発、ファシリテーションの基礎的なトレーニング法があり、本研究ではこれら3つの技法を英語教育に有機的に組み合わせることで、学習者の英語のプロダクション能力を伸ばすことを目指した。

Self-talkは個人学習をベースとするものである。その狙いは二者または複数者間の円滑なコミュニケーションである。Self-talk学習の成果を発揮するには、中高生にとって教室という実際のコミュニケーション場面が必要である。また双方向の伝達を行うには、ことばだけではなく、身体や場面など見える部分から入ることは生徒たちには理解が容易である。mirroringやpacingといった見える形での対人関係を向上させるスキルを導入することで、語学習得におけるコミュニケーションを円滑化することができる。

(1)Shadowing

シャドーイング (shadowing) とは影のようについていくという意味がある。外国語の同時通訳の本格的訓練に入る前のトレーニングとして利用されてきた経緯から、英語教育でも利用されるようになった。

同時通訳では英語を聞くと同時に、即座に日本語に通訳しつづけなければならない。通訳をする前段階として、聞こえる英語をそのまま復唱するトレーニングがshadowingである。英語を聞いた通りに一時的に記憶保持して、口に出してということが通訳トレーニングの前段階に必要とされる。

語学学習では日本語に通訳する必要はなく、英語をそのまま理解するだけでよいので、高度なスキルは要求されない。ただし、「英語をそのまま理解する」という語学学習の究極の目標を導きやすくしてくれる学習方法と考える。

(2)Self-talk

ストレス・マネジメントにはいくつかテクニックがあるが、意識の中に生まれる言葉には、自己肯定的なもの (positive self-talk) と自己否定的なもの (negative self-talk) がある。自己肯定感の伴うself-talkがパフォーマンスの効果が上がるのは言うまでもない。英語という言語を使ったときのセルフトークはpositive self-talkを旨としていく。このあたり、学習者が自由に使いこなせない外国語故に教える側がpositiveな

方向にコントロールを効かせたいところでもある。

本実践は語学のスキルアップを狙うものであり、本筋とはやや異なるものではあるが、与えられた題材に対して、ポジティブなパフォーマンスを引き出すkey questionに対して、自らの考えを英語にして自分に対して答えるという学習過程をセルフトークとする。

Text readingにおいて、自分にとって何が重要か、何が興味あることかの観点をもって臨むことで、textに向かいながら自己内対話を進めることを行う。

(3) Mirroringとpacing.

ミラーリング (mirroring) とは相手の動作に自分の動作を合わせる方法のことを言う。相手が足を組んだら自分も足を組み、相手が腕を組んだら自分も腕を組む。相手の動きを写し鏡のようにして合わせていく。この動作をさりげなく続けることで無意識に相手とのラポールの構築につなげることができる。

ペーシング (pacing) とは同じ考え方、感情、態度に自分のペースを合わせることである。言語を媒介にして共通点を探し出したり共通点を持つようにしたりすることで相手に好感を持たせることができる。

いずれも共感という人間関係の構築のための具体的な方法である。英語という外国語を生きたことばとして使うためには、mirroring、pacingという円滑なコミュニケーションスキルを語学学習に利用したい。

3. Self-talkの実践

(1) 授業実践の目的

- 1) Self-talk実施クラス (B組 n=40) ではテキストの英文解釈をself-talk中心に指導した。
- 2) 自己和訳実施クラス (C組 n=40) でself-talkの代わりに、自分でテキストの和訳を言うという指導を行った。Self-talk実施クラスと自己和訳実施クラスでPre/post-testと行うトピックに関するessay writingにおけるproductionの量や質に差が出るかどうかを見る。

(2) 授業実践の方法

Pre/post-testを行い、Self-talk実施クラスと自己和訳実施クラスの比較を行う。Pre/post-testは該当レッスンのトピックに関する短いessay writingを生徒に行わせる。その後Pre-testとpost-testを混ぜ合わせ、どれがPre/post-testか分からないようにして採点する。採点は英語教員3人が行う。採点の観点は内容つまり文章の質 (=quality) と量 (=fluency) と正確さ (=accuracy) について数値化できるものとする。具体的には

- 1) 質 (=quality) : 正しい文法で書かれた複文の数およびその複文の語数。文章のまとめり。
- 2) 量 (=fluency) : 総語数

- 3) 正確さ (=accuracy) : 英文の正しさ (総語数に対して誤りの数の比率)

以上の3点を、各観点5件法で採点する。3人の採点結果の相関を調べ、問題がなければ、観点別および合計点でt検定により群間比較を行う。

(3) 処遇 (treatment)

1 時間の指導過程

- 1) 前パートの復習
- 2) 本パートの新出単語の学習
- 3) 本文のリスニング
- 4) 本文の理解の確認 (和訳中心)
- 5) 音読練習
- 6) ①実験群 : Self-talk
②対照群 : 各自で和訳をもう一度
- 7) 新出句、新出語法・文法の他の例文の理解
- 8) 英問英答

(4) Pre/Post-testの内容

レッスンに入る前にトピックに関する短いessay writingを行わせる。レッスンは4時間完成のもの。Pre-test, post-testとも同一課題。

(図1) Pre/Post tests

Lesson6 Do you believe fortune-telling? Why yes? Why no?

(名前は裏に書かせる。裏には1, 2の番号を選択し、pre-test=1, post-test=2に○をつけさせる。これは後の採点において採点者が生徒の個人的な名前やPre/Postの別で採点に影響が出ないようにするため。)

(5) Self-talkの内容

- 1.) Do I like this story? Is this story interesting?
- 2.) Why yes? Why no?
- 4.) Is this story important/interesting to me?
- 5.) Why yes? Why no?
- 6.) What part of this story do I think I should read?

(6) 結果

質、量、正確さの3つの観点から見た生徒の短いessayを比較すると、質と正確さでは差がないが、量では大きく差が出た。

(7)考察

教科書の英文を読むと言うと、和訳や英問英答などをさせることが主たる指導だったが、self-talkを加えることで生徒たちにはテキストと自分との関わりが認識されるようになった。例えばstoryを気に入ったか、気に入らなかったかのかという質問をされたことは一度もなかった。語学では正しく理解できたか、せいぜい速く理解できたかという観点でテキストを読んできた。そこに好き・嫌いの観点をさしはさむことで、自分とのテキスト内容との関わりを感性で捉える視点をもつこととなり、内容理解に自分という存在が大きな意味を持つことになる。またstoryが重要であるかinterestingであるかという問いも、自己を内容理解に大きく介在させることになる。

いずれの間も後ろにWhy?のquestionが付いてくる。この質問はきわめて重要である。なぜならテキスト内容と自分との関わりを他者に分かるように言語で説明しなければならない。Outputをさせる訳だが、その内容はテキストからうまく拾い出してこなければならない。ここに語学学習の深化が生まれる。ただ英語を選び出すだけでなく、自分好みに組み合わせなければならない。Why-questionに対して高度な言語操作の学習が成立することになる。

教室でのself-talk指導では、教師側が用意したself-questionsはシンプルで、的確なものがあったが、「自己性」を重視する方針なのだから、生徒が慣れてくれば、独自のquestionsを考えたさせたほうがよい。Questionsのコントロールがされ過ぎの感は否めない。

4. Mirroring, Pacingの実践

テキストの内容を各自がSelf-talkした後、生徒に隣の生徒とペアを組ませ、互いにSelf-talkをベースにした発表活動を行わせた。指示は相手の動作をまねをする。例えば肘を机についていれば、同じように肘を机につける。

また相手の言ったことば（英語）を肯定的に繰り返す（私は生徒にはconversational shadowingと言っている。Tim Murphyから聞いたものである。）。

これらのことをすることによって、コミュニケーションを恥じず、恐れず円滑に行わせることができると考えた。次のような活動の展開があった。下線部の英語がpacingとなっている。

A : I like the story because I'm interested in Manga very much.

B : You like Manga. Why do you like Manga?

A : It's fun to read Manga. I often read Manga at school and home. I can relax when I read them.

B : You can relax when you read Manga.

A : Yes, that's right.

このMirroring, Pacingを用いたテキスト内容についての会話は、self-talkで生み出した英文を再度生成することになる。

言語学習でのoutputの重要性はSwaine (1993) により明らかになっているが、これはrehearsed output production (Mennin, 2003) となり、若干のcorrections / modificationsを伴うことを期待している活動である。Partnerのconversational shadowingにrecastが行われれば、なお有効に働くことになる。

4. セルフトーク学習法と教室での活用法 (アイディア集)

まだ実施には到っていないが、生徒の自己学習を助けるためにself-talkに徹した学習法のアイディアはいくつかある。

(1)Read and ask yourself

ニュース英語でも何でも構わないが、やさしい英文を音読しながら、自分自身に質問をする。本研究でも使ったものだが、最も基本的なself-talk学習法である。

【教室】これは授業そのものになるもの。しかしはたして音読中に自問をしているかが問題だが、自問の例をいくつか事前提示・学習させておく必要がある。これがもっとも基本的なセルフトーク学習法である。

(2)One day in my life

一日の出来事を時系列でつぶやく。I woke up at seven in the morning. I set the alarm at 6 :00 last night but it didn't ring. I almost overslept. Suddenly an angel showed up in my room and whispered to me to wake up. と次々に一日の自分の過ごし方を語っていく。かならずしも事実だけでなくともよい。口の滑りの良い英語が思わず出てきたら、それを続ければよい。生身の人間が相手だとあまり突拍子もないことは言えないが、Self-talkのよさはそんなことは気にせず、自分のペースで語ればよい。

【教室】ペアになり、方や一日の出来事をぶつぶつと語り始める。こういう活動は短い時間でやるのがよい。30秒ぐらいで十分である。1回目はただしゃべらせておき、2回目にペアのもう一方は相手の語りを聞きながら、keywordになりそうな語を相手の顔を見ながら繰り返す。Pacingを行う。これにより相手も安心感をもって話すことができる。不安をできるだけ取り除くことが初歩の英語では大切だ。

(3)One sentence and Why-question

心の中だけで英語で考えることを持続させることは、外部からのいろいろな要因にじゃまされて難しい。例えば、通勤列車に乗り吊革をにぎりながら、self-talkをしましょう。通勤・通学の列車の中で、目的地まですることもなく窓外を眺めながら、Self-talk学習をすることは、時間の有効利用という点で最高のシチュエーションと言える。周囲の人の話やぶらさがりの広告、なんでもないことからふと英語による思考はふととぎれてしまう。これからの仕事の予定や昨日あった職場、学校での気になることなどちょっと思考がそちらにずれてしまうと、もうもどらない。外国語ではことばが次になかなか出てこないために、持続が難しい。しかしone sentenceだけなら、なんとか英語で言うのは無理なく言える。そこでそのone sentenceの後に「なぜ」の疑問文をすぐに想起することを自動化することで、英語の発話が持続できる。たとえば、

One sentence : I speak English.

Why-question : Why?

Answer : I learned English at school for a long time. Learning English was easy for me at first, but the harder I study English, the more difficult it becomes.

振り返り：今の発話を文章の長さ（長いほどよいという観点）、文法的正確さ、イディオムの表現の豊富さ、複文の割合（複文が多いほどよいという観点）など自分で観点を決めて、見直しをしてみるのも、振り返りを学習の中に入れることは学習を強化してくれる。

(1)Self-question

カードに英語の質問をいくつか書いておき、一枚選んで、即座に答える。話題は自分で考えればよい。教室に各自のカードを持ちこみ、カードゲームとしてペアやグループで行う。話題は次のような「よくある話題」をいくつか含んでいたほうがよい。何回も繰り返すことが肝心である。中学、高校などによって内容や英語のレベルを調整するとよい。即興性が大切で、ひとりで十分できるものである。

質問例

中学

What did you do yesterday?

What are you going to do tomorrow?

What do you want to be in the future?

高校

What is the latest news you were interested in?

What is the information only you know?

Which book or movie do you think was good?

Is there anything different from usual you have found on the way home?

【教室】はじめはしゃべりやすいように相手のもっているカードを借りて、そのカードに書かれている質問をする。相手は普段からカードで練習していれば、答えやすい。次に互いの手持ちのカードを相手に質問する。即座に答えられれば、練習の成果が出たといえる。Well, Let me see …, Repeat your question.など即座の答えが難しければ、これらの語を準備しておく。

(2)Picture Card Self-talk

絵でも写真でも、自作でも買ったものでなんでもよい。カードには写真か絵が載っていることが大切。ランプカードのようにカードを裏返しにして山として積み、上から一枚ずつ表にして、絵を見た即座にそこに見えたものの様子やそれから連想されることを英語で言う。ひとりでもできるし、複数でカードゲームとして遊ぶのもよいだろう。

絵が得意で描くのが好きなら2倍楽しめる。これも即興性が重要である。

5. 今後の課題

コミュニケーションが重視される授業が展開されることが、学校教育の現場では当たり前ようになってきたが、生徒各自の学習方法、とくに家庭での学習については、旧来のやり方（単語の予習、和訳ノートづくりなど）が推奨されている。しかし、授業が変われば、学習方法も当然変化せざるを得ないのだが、これまであまり生徒の「学習」の在り方に言及したものが見られない。Self-talk学習法は基本的な学習法の一つとなりえるだろう。

Self-talkということばの響きから、独りよがりな英語になるのではという危惧があるかもしれない。これについては教室という絶好の交わりの機会を利用し、mirroring, pacingを用いたコミュニケーション場面を授業で設定することで解決できる。自己表出をself-talkで試みることができる。学校で使うテキストから語彙、文法を身につける学習の中にも、outputを入れることで、語彙・文法の力の定着の効果が高まる。

アイデア集に示したように、self-talk学習方法のアイデアはいくつかあるので、中学生や高校生を教える立場として、彼らの発達段階に応じた適切な指導実践をしていきたと考える。それらが個人個人の学習スタイルとして定着し、将来大学生、社会人になってもself-talk英語学習を続けるに足るものとなっていくように改善を心がけ、今後も指導にあたりたい。

参考文献

- 浦島久(2006)『1分間英語で自分のことを話してみる』東京：中経出版
- 門田修平(2007)『シャドーイングと音読の科学』東京：コスモピア
- 松本亨(1980)『英語で考える本』東京：バイインターナショナル
- Mennin(2003). Rehearsed oral L2 output and reactive focus on form. *ELT Journal* 57 (2), 130-138
- Murphey, T (2000). LANGUAGE HUNGRY! Tokyo Macmilan Languagehouse
- Swaine, M. (1993). The output hypothesis: Just speaking and writing are not enough. *The Canadian Modern Language Review*, 50 (1), 158-164.
- 玉井健(2004)『決定版 英語シャドーイング』東京：コスモピア